

当事者であり 支援者であること

話題提起

自己紹介

- ▶ のうまつ ななみ
能松 七海（24）
- ▶ 先天性脳性麻痺・車いすユーザー
- ▶ 幼稚園も含め、大学まで通常の学校に通う
- **学校で障害を理由に意思が尊重されないこともあった**
- ▶ ゼミの先生の勧めで自立生活センターに就職
- ▶ 社会福祉士・介護福祉士資格保持
- ▶ 当事者運動、相談支援を行う



本音と言えなかった小学生時代

学校で障害を理由に意思が尊重されないこともあった

→実際は、障害そのものが原因ではなく、

相手の「障害に対する捉え方」＝相手の考え方（人的要因） によって無視、抑圧

▶ 介助員に「今は離れてほしい」

→危ないから、何かあったら責任取れない、先生から言われているから

※私にとってそれは「介助」ではなく「見張り」だった（必要な時にいないことも多々）

→自分の身体のコトは自分が一番よくわかっている

「私はクラスのみんなと話したい」「これは自分でできるのに」「私はこうしたい」
という思いを常に持っていた

→そもそも「大人」と「こども」という立場の差 本音は言えない

頑張って伝えても結局聞いてもらえない、伝わらない 怒りたいけど怒れない

▶ クラスメイトとも距離ができる

クラスメイトとの距離と私への認識

常に大人が「横」にいる状態で、こども同士は話しにくい＝**基盤の友人関係の揺らぎ**

※「ぴったり横で見張る」と「近くで見守る」ことは全く異なる

→本人より先に介助員が「ありがとう」「ごめんね」＝**言うべきことを言えない子**

→できることが勝手に奪われていき、適切な介助も受けられない＝**何もできない子**

→介助員の失敗を私の失敗として語られる＝**邪魔な大人と一緒に邪魔な子**

クラスメイトに頼ると「私の時間を奪わないで」＝**自分が困った時だけ頼る自己中な子**

→クラスからの仲間はずれ、根拠のない悪口、ただの暴言も出るようになる

本当はできる、一緒にやりたい、手を貸してほしい..... 何も言えなくなっていく

授業中だけが自分の意見を言える時間 何があっても手放さなかった

私の声を聴いて 私はここにいるという気持ちの表れでもあった

→近くの席の子から笑われ、あとから陰口も 教師からの信頼だけが積み上がっていく

それでも、日常も行事も、彼らと一緒に

「学年に私がいること」が理由で行事ごとなくなることも（大人だけで決められ、恨まれる）

→中学では状況が更に悪化 その時点で明確ないじめへと発展していた

中学生当時の心理状態

何をされても、

「あいつらが勝手にやっているだけ。だから私には関係ないし、いじめでもない」
いじめだと認めることは、自分がされた仕打ちをもう一度思い起こす（再体験する）こと
その心理的余裕は当時の自分にはなく、
心のバリアをはり続け、一人の世界を作ることを、「自分の居場所」とした
ここから逃げ出したいという気持ちはずっとあったが.....

彼らの望みは、私が彼らの前から消えること

学校に行かなくなったら負け。卒業まで絶対に負けたくないという気持ちの方が強かった

「学校で勉強する」権利を自ら放棄したくなかった

→中学までのことは、中学で終わりにしたい **他人に未来を決められたと言いたくない**

→「自分の居場所は、自分の力で探す」

今よりも勉強に打ち込んで、自分の行きたい高校に行く！！

志望校合格後

▶ クラスはとて面白い雰囲気。当たり前でクラスの一員として見てくれる

現在まで関係が続く友達と出会う＝現在の自分を形づくるきっかけの、大きな出会い
優しくされると、「裏がある」「もらってばかりじゃいつか失望される」という不安
人を信じたいけど、信じきれない 矛盾と葛藤で空回り
→決して見放さず、でも無理なく、そばにいてくれた ※『ただ友達になっただけ』

▶ もう一度人を信じ始め、「外の世界」に目を向けた

クラスの話し合いに当たり前にいる 行事でも仲間はずれにされない
困ったら誰かが手を貸してくれる 自分の話を聞いてもらえる
友達との教室移動 友達が悩みを打ち明けてくれる ふざけあえる
自分の活躍の場所があり、応援してもらえる.....などなど

▶ 高校生活は、欲しかったはずの全てが詰まった場所

▶ 不安で素直に受け取れない時も、誰かが必ず支えてくれた

もらって嬉しかったものを、大切な人に分けられる自分になりたい

支援者として 人として大事にしたいこと

- ▶ 誠意を持って向き合い、対等でいる
- ▶ 言動の奥にある本音や葛藤を読み取る
- ▶ そのままの相手を受容する
- ▶ 自分の価値観を押し付けない
- ▶ 相手の時間を奪わない＝話を最後まで聞く
- ▶ ひとりで背負わない、背負わせない
- ▶ 選択肢を提示し、相手の選択を支える＝可能性を潰さない
- ▶ 継続的な関係性を保つ

大切なものを、大切にできる自分であり続けるために

活動中に感じるジレンマ

▶ 対等性の確保の難しさ

必要なサービスやヘルパー利用が認められない

娯楽に出かけるのにヘルパーが必要な理由

「親がいるけどヘルパー必要？」「毎日風呂に入りたい理由は？」「トイレは一日何回？」

その説明は、健常者には必要がないもの

プライバシーの侵害 人としての対等性に欠けるのでは？

また、計画作成時の言い回しが上から

▶ 本人に確認しないまま支援を進める

支援者が先回りしがち 気づけば本人の意思を誰も確認していなかった

→強引な支援の押し進めは、本人に変化を強制することでは？

本人の声をなかったことに＝抑圧

意見を言う権利と聴いてもらえる権利は別 本当に相手の言葉を「聴けて」いるのか？

「選択肢の提示」が無意識下で支援者依存になりがち

だからこそ大切にしたいこと

▶ 人的要素、環境要因、制度の問題.....

様々な要素が、社会をつくっている

「社会」は大きすぎて、どう闘えばいいかわからないこともある

「当事者であり子ども」だった頃、理不尽さに怒り、悲しくなることも多かった

「一人で闘わない」と思っていた時間も多くあった

大人になり、支援者としても様々な立場の人と接するようになって

「様々な要素が絡み合っていること」を肌で感じ、「支援者としての葛藤」も知った

「当事者である支援者」として、声を上げ続けること

仲間を見つけ、共に闘うこと



ご清聴
ありがとうございました